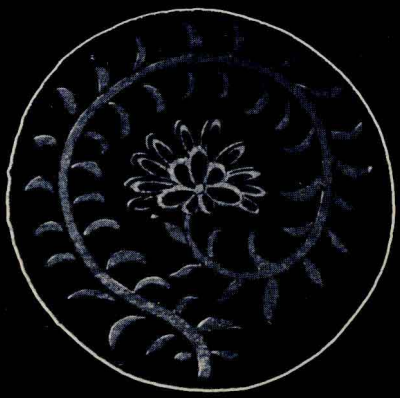

講座 夏目漱石

第四巻

漱石の時代と社会

講座 夏目漱石

第四巻 漱石の時代と社会

三好行雄・平岡敏夫
平川祐弘・江藤 淳 編

有斐閣

編者紹介

三好行雄（みよしゆきお）　大正15年生
現在，東京大学文学部教授

平岡敏夫（ひらおかとしお）　昭和5年生
現在，筑波大学文芸・言語学系教授

平川祐弘（ひらかわすけひろ）　昭和6年生
現在，東京大学教養学部教授

江藤　淳（えとうじゅん）　昭和8年生
現在，東京工業大学工学部教授

講座 夏目漱石　第四巻〈漱石の時代と社会〉

昭和57年2月15日　初版第1刷印刷
昭和57年2月25日　初版第1刷発行

定価 2,200円

編者　三好行雄　平岡敏夫　平川祐弘　江藤淳

発行者　江草忠允（えぐさただあつ）

発行所　株式会社 有斐閣

東京都千代田区神田神保町2〜17
電話　東京（264）1311（大代表）
郵便番号〔101〕振替口座東京6-370番
本郷支店〔113〕文京区東京大学正門前
京都支店〔606〕左京区田中門前町44

印刷　株式会社精興社・製本　和田製本工業

© 1982，三好行雄・平岡敏夫・平川祐弘・江藤淳．Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-07114-4

はしがき

夏目漱石は日本の近代作家のなかで、きわだって多くの読者に愛され、読まれつづけてきた作家である。近代という一時代と、それを生きた人間の命運をふかく問いつづけたその主題はいまなお古びることなく、現代の人間たちの避けて通れない多くの根本的な問題を提示している。まさしく「国民的作家」と呼ぶにふさわしい存在である。

それだけに、漱石によせる研究者や批評家の関心もふかく、とくに戦後三十余年間における漱石研究の進展は質・量ともにまことにめざましいものがあった。研究の対象や方法も、実証的な伝記研究から、作品論・作家論・文体論、あるいは影響関係論や思想史からのアプローチなどきわめて多彩で、専門の研究者といえどもそのすべてに応接することは容易でない状況にある。また、研究の多様化・細分化にともなって、そこに描かれる漱石像もさまざまであり、木を見て森を見ないたぐいの皮肉も生じつつある。漱石の人と文学の総体はかえって見えにくくなっているともいえよう。

この『講座 夏目漱石』は、そうした状況に対応して、ひろく漱石とその作品に関心を有するひとびとのために、漱石文学の世界を多角的に解明することをめざして編まれた、日本の近代作家個人を対象とするはじめての本格的な講座であるが、膨大な漱石研究の屋

上に屋を架す愚におちいることを避け、多彩で斬新な視座による考察を試みることで、漱石研究の新しい局面をきりひらくことを意図した。個々の作品世界をさまざまな角度から追求し、新しい作品像を提示することとあわせて、作品論・作家論の枠にこだわることなく、具体的な一時代を生きた生身の人間としての漱石の全容を彷彿させることに意を用いたのもそのひとつである。

そのために、われわれは分化した専門の領域を越えて学際的な協力が必要だと考えた。本講座は、国文学・比較文学・文化史・精神医学など、諸科学の共働の場として編まれている。また、テーマと執筆者の選定についても、各執筆者の年来の研究テーマを尊重して参加を乞い、あるいはテーマ自体を執筆者の選択にゆだねるなど、それぞれの執筆者の意向や関心をできるだけ生かせるように配慮した。したがって、作品をあつかったふたつの巻を別にして、かならずしも網羅的な編集方針はとらなかった。

本講座の巻別構成についても一言しておきたい。

第一巻「漱石の人と周辺」は漱石そのひとの生いたちから晩年にいたる、生活者および文学者としてのさまざまな問題と、同時代の人的交渉を主とする周辺の相を多面的に論及し、第二、三巻「漱石の作品(上)(下)」は、主な作品についての作品論を主体とするが、俳句・漢詩や日記書簡・書画などについての論も収めている。第四巻「漱石の時代と社会」では、漱石の生きた時代を、文化史・文学史などの諸側面から照明をあて、第五巻「漱石

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

の知的空間」では、古今東西にわたる漱石の知的空間・文化的空間と土壌をさぐった。しかし、これらの巻構成はかならずしも厳密な基準に則ってのものではなく、各執筆者の意向を尊重しながら、諸論考を収めるおおまかな枠組みとして設定されたものであることもお断りしておきたい。

以上、本講座の編集のねらいや方針について簡単に述べたが、幸いに、編者の意図を諒とせられた多くのかたがたに御参加いただき、いずれも充実した力作の御寄稿を得て、所期の目的を充分に果たしえたと自負している。御協力いただいたかたがたに重ねて謝意を申し述べたい。また、本講座の企画・編集から刊行にいたるまで、有斐閣編集部の澤井洋紀氏のお世話になった。附記して謝意を表する。

三好行雄
平岡敏夫
平川祐弘
江藤　淳

目次

漱石と二十世紀　磯田光一　1

十九世紀的前提の崩壊　一九〇〇年の位置　「脱亜」のなかの漱石
個体と神話の間で　新世紀のディレンマ　漱石の相対主義　むすび
——漱石死後の漱石

作品にあらわれた漱石の日本近代化観　江村洋　25

——『それから』を中心として——
絹帽と鰻屋　麺麭を離れた生活　日本は一等国か？　西洋との拮抗
『現代日本の開化』　漱石と鷗外の場合

漱石と鷗外　小堀桂一郎　52

鷗外の「技癢」　『三四郎』と『青年』　漱石とイプセン　鷗外のイプセン理解と漱石

「新しい女」の衝撃——漱石・泡鳴・イプセン——　大澤吉博　78

『道草』と「新しい女」　泡鳴の主張　イプセンをめぐって

漱石の帰去来——朝日新聞入社をめぐって——　上垣外憲一　96
漱石と陶淵明　漱石と新聞　文学者の類型　漱石とカーライル
「高等遊民」と閑適の境地

漱石と山の手空間——『門』を中心に——　前田　愛　120
二つの街並　崖下の家　〈いま〉と〈ここ〉

漱石の季節——『門』の循環する時間——　小平　武　146
〈自然〉と〈人事〉　自然と生活の調和　循環する季節

漱石の軍国主義批判——『点頭録』をめぐって——　鈴木秀治　162
漱石最晩年の社会観　第一次大戦および日露戦争の評価　軍国主義とその影響　軍国主義とその批判

漱石の登場——日本近代文学におけるその位相——　竹盛天雄　180
一九〇〇年前後　『猫』の位相　方法的・意識的作家へ

漱石と自然派の人々　相馬庸郎　201
『帝国文学』と『早稲田文学』　短かった「親密関係」　「余裕派小説」論

争　二代目たちの対立

漱石と白樺派　西垣　勤　224
『野分』と武者小路、志賀　『それから』をめぐって　漱石と白樺派の間

漱石と大正期教養派　中山和子　237
漱石の孤独と大正期教養派　『それから』評　文明批評における落差
『三太郎の日記』と漱石　魚住折蘆と漱石

漱石と「朝日文芸欄」——写生文論の展開——　熊坂敦子　262
「朝日文芸欄」の特色　写生文の転機　写生文と小説の方法　「文芸欄」の写生文論

漱石と新聞小説　浅井　清　284
新聞小説の問題点　漱石の原稿用紙　執筆と連載　時事性をめぐって
季節感をめぐって　手法と文体

『道草』における作者と主人公の関係——マクレラン訳との文体比較を通じて——　大嶋　仁　308
融合と分離　『道草』第一章の分析　『道草』の非私小説性をめぐって

スラブ圏における漱石の受容　土谷直人　327

執筆者紹介（329）

『講座　夏目漱石』全巻目次（巻末）

《凡例》

原文引用は次の原則によった。

① 漢字は、原則として新字体によった。

② 仮名づかいは、原文が歴史的仮名づかいであれば、それに従った。

③ 執筆者による引用文中の補注は〔　〕で示した。

漱石と二十世紀

磯田光一

一　十九世紀的前提の崩壊

「会議は踊る。されど進まず」という著名な言葉は、ウィーン会議のときにリーニュ公爵が吐いた言葉として知られているが、高坂正堯の『古典外交の成熟と崩壊』(昭53)のなかに「会議はなぜ踊りつづけたか」という興味ぶかい一章がある。高坂の説明によると、ウィーン会議の主役というべきメッテルニッヒは、じつは会議が踊って議事が進まないことをひそかに望んでいたのであって、別言すれば、暗黙のかけひきをやれるだけやらせておいたあとで、機の熟したときになってはじめて合意を求めるという、古典的な外交術のパターンを用いていたというのである。貴族制がなお余光を保っていた十九世紀の前期には、外交官は貴族であって、「政治に参加させる人々は限定するが、しかし、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一般大衆に対して要求することも少なく、ゆるやかに統治する」（同書、一五八頁）という貴族主義の政治感覚が、国内だけでなく外交にも生かされていたのであった。ところが次の世代になると、この原則が崩壊しはじめるのであるが、高坂はそのメルクマールを一八四八年の「二月革命」に求め、「その成功と失敗とによって、〝旧体制〟を守る人々と、それを攻撃する人々が頼り、あるいは信じて来た基本的な価値を共に破壊し」、伝統的な価値観への「畏敬の念」を消滅させたという。二十世紀に起った第一次大戦が、オーストリアの皇太子の暗殺を契機に、一ヵ月あまりで全面戦争に突入したのは、「会議は踊る」という成句の前提にあったもの、すなわち古典外交の様式とヨーロッパの勢力均衡という二つの前提が消滅したからにほかならない。この西欧政治史の前提の変容は、同時に文化の質の変容でもあり、十九世紀と二十世紀の差異を物語るものなのである。私は漱石と無縁のことを語っていると思われるであろうか。漱石がイギリスに留学した一九〇〇（明治三十三）年が、十九世紀が二十世紀に変ろうとする年であることを考えるとき、漱石が西洋に触れたときの環境が、漱石の後年の文学の展開にどう作用したかを、巨視と微視との二重構造においてとらえなければならない。まず一九〇〇年にしぼって考えてみよう。

二　一九〇〇年の位置

この年の一月、かねてから英仏両国間に対立のあったナイジェリア問題に一つの解決の道をみいだ

したイギリスは、ロイアル・ナイジャー会社の支配権を獲得すると同時に、フレデリック・ラガードを高等弁務官として当地に派遣した。[1] 一月十日には、陸軍総司令官フレデリック・ロバーツは、キッチナー卿の率いる軍隊とともに南アフリカに上陸した。アフリカ南端のトランスヴァールが隣接するオレンジとともにイギリスに併合されるのは、二年後の一九〇二年であるが、ボーア戦争中の一九〇〇年九月一日にロバーツ司令官はトランスヴァール併合を宣言し、イギリスは十月二十五日に形式的には併合体制をとった。その三日後に漱石がロンドンに到着したとき、翌二十九日の日記に、

……南亜ヨリ帰ル義勇兵観迎ノ為メ非常ノ雑沓ニテ……

というときの「南亜」は南アジアではなく南アフリカのことで、この軍隊はトランスヴァールからの帰還兵にほかならない。イギリスの植民政策へのアフリカ現地の反発はその後もつづき、やがて半世紀を経過してから、アジア・アフリカ地域のナショナリズムとなって広汎に噴出するのである。また一九〇〇年は、イギリス労働党が発足した年であり、[2] 日本では横山源之助『日本之下層社会』の刊行された翌年である。二十世紀における労働運動の展開なしには、『明暗』の小林という人物も描かれはしなかったのである。他方、アジアに目を転じれば、漱石が上海に寄港したときの中国では、義和団の乱による列国との摩擦で政情は不安定であった。

ここで文学・思想の分野に目を向けるならば、われわれはこの年にワイルドとニーチェが死んでいることに注目しなければならない。理性の支配にもとづく十九世紀に反旗をひるがえしたワイルドとニーチェは、前世紀の世紀末の運命を象徴するかのように、十九世紀の終末とともに世を去ったので

ある。ワイルドについては、世紀末文学への漱石の反応の一部として考えていいであろうが、ニーチェの場合は、「漱石山房蔵書目録」のうちに『ツァラトゥストラ』の一八九九年版英訳本があり、『吾輩は猫である』のうちにも次のような評言がみられる。

とにかく人間に個性の自由を許せば許す程御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか担ぎ出すのも全く此窮屈のやり所がなくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。一寸見るとあれがあの男の理想の様に見えるが、ありや理想ぢやない、不平さ。(略)あの声は勇猛精進の声ぢやない、どうしても怨恨痛憤の音だ。

ここに高山樗牛経由のニーチェが作用していたかどうかは別問題としても、右の用語のうち「窮屈」という語のニュアンスから考えて、『草枕』の冒頭部にある「意地を通せば窮屈だ」という場合の、「自我」=「我執」のもたらす「窮屈」と、そこからの脱出願望が読みとれると思われる。

しかし一九〇〇年という年は、自然科学史においてもきわめて重要な年であった。この年の十二月十四日にマックス・プランクは「量子仮説」を唱えた論文を発表して二十世紀の物理学への道を開き、さらに生物学の分野では、メンデルの遺伝学理論がド・フリースらによって再発見されるのである。科学史上のこの二つの事件は、人の想像する以上の意味をもっていて、量子論はニュートンの力学体系を大きく揺るがすにいたるのである。コリングウッドは『自然の観念』(一九四五年刊)のなかで、コペルニクスの地動説の登場の意味を、天と地との逆転よりもむしろ「宇宙にはいかなる中心もない」という観念を提出したことにある[3]、と述べているが、コペルニクスの後継者であるニュートンは光を

エーテルの波動と考えながらも、光の媒体であるエーテルを不動のものと考えることによって、宇宙の最終的な静止物を辛くも保持していたということができる。プランクの量子仮説の登場は、エーテルの不動性への挑戦であり、五年後にアインシュタインの「特殊相対性理論」を生み出す序曲をなしたのであった。二十世紀の科学思想において、プランクの量子論はのちの素粒子論の基礎をなし、アインシュタインの相対性理論が物理学におけるアナーキズム、すなわち「天」と「地」との観念の追放を意味したことも、ここにつけ加えておいたほうがいいであろう。この文脈のうちに漱石を据えるとき、漱石の文学は「天」への希求と「地」の不動性を求める〝不安の文学〟の相貌をもってみえるのである。

つぎにメンデルの遺伝学についてみるとき、その画期的な主著『雑種植物の研究』が一八六五年に刊行されているからといって、一九〇〇年におけるド・フリースらによる再発見の意味を否定することはできない。『雑種植物の研究』は三十五年間、学界で注目されずに埋もれていたのであるが、その画期性を再発見したのが、ド・フリース、コレンス、およびチェルマックの三人であり、ここにおいてメンデルは死後にはじめて脚光をあびるにいたるのである。漱石の『趣味の遺伝』にみられる遺伝学の知識が、メンデルという名を知っているだけで、メンデルを読んでいないと推定されるのは、漱石の二十世紀思想にたいする位置を考える上で興味ぶかい。

メンデリズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘツケルの議論だの、其弟子のヘルトウイツヒの研究だの、スペンサーの進化心理学説だのと色々の人が色々の事を云ふて居る。

漱石の遺伝論を決定しているのは、漱石蔵書中のワイスマン『生殖質――遺伝の理論』の英訳本（一八九三年刊）とギュヨー『教育と遺伝』の英訳本（一八九一年刊）の二冊と推定されるが、前者は「生殖質」(germ plasm) の連続性を説いたもので[4]、後者は「生の哲学」と進化論を結びつけて人間の向上を説いた理論家の著書である。いずれもメンデルにみられる非連続性の契機――すなわち赤い花と白い花とを交配すれば、赤が一、白が一、ピンクが二の比率で次の世代ができるという理論――とは無縁である。遺伝が「親の因果が子に報い」や「ウリのつるにナスはならぬ」の変奏であるとしても、そのレベルで遺伝学を考えていたところに、漱石と現代生物学との決定的なひらきがある。のちに畔柳芥舟に宛てた手紙（大3・1・13）は、畔柳から教示されたメンデルの理論への漱石の反応として興味ぶかい。

そこ迄メンデリズムが進歩すれば大変なものではありませんか。実験心理で発見した事は精神界の極めてカタツパシで夫でぐん〳〵全体が押せるものでないと同じぢやありませんか。従つて僕はメンデリズム杯と文芸などゝは今の所到底結び付けて考へられるものでないと考へてゐますがね。

その後の二十世紀生物学の異常な進歩と、その果てにやって来た分子生物学と分子遺伝学の実態を思うとき、漱石の守ろうとしていたものが何であったかは、およそ察しがつこうというものである。

(1) 本稿の政治史についての事実は、Neville Williams, *Chronology of the Modern World* (revised edition, 1975) を中心に、他の歴史書および『エンサイクロペディア・ブリタニカ』などで補った。なお二十世紀の開幕の年は一九〇一年

であるが、漱石の英国留学の年が前年なので、便宜上、一九〇〇年の諸事象の二十世紀における展開を、漱石と関連させる方法をとった。なお、本稿脱稿後に岡倉登志『ボーア戦争』（教育社、昭55）が出たので校正時に参照した。

（2）名称が現在の "Labour Party" となるのは一九〇六年であるが、一九〇〇年の「労働代表委員会」の結成が、通常「労働党」の成立とみなされている。詳しくはマックス・ベア、大島清訳『イギリス社会主義史』（岩波文庫、昭50）第四巻七章を参照されたい。

（3）Collingwood, *The Idea of Nature*, 1945, Oxford, p. 97.

（4）「生殖質」はドイツ語では "Keimplasma" と呼ばれる。ワイスマンの遺伝理論の思想史的位置づけについては川喜多愛郎『近代医学の史的基盤』下巻（岩波書店、昭52）八六〇頁以下を参照。またワイスマンの理論は東大の外山亀太郎によって摂取されていたが、外山はメンデル理論の再発見に刺激されて新実験を行い、明治三十九年に「昆虫の雑種学研究一、家蚕の雑種に就いて、特にメンデル遺伝法則を論ず」（原英文、『東京帝国大学農科大学学術報告』七巻二号）を発表、これが日本の遺伝学の第一歩になったことを、篠遠喜人「日本最初の遺伝学講座」（『無限大』49号、日本IBM社、昭55）は伝えている。漱石の『趣味の遺伝』の発表は同年一月であるから、執筆は外山論文の発表以前と考えられる。

三　「脱亜」のなかの漱石

漱石が一九〇〇年に二十世紀の源流たるべき諸事象に触れていたころ、日本も同じ二十世紀に入ろうとしていた。一九〇〇年の『中央公論』をみると、二月号の「社会」欄には「十九世紀か二十世紀か」という論説があり、八月号では「雑纂」欄に「十九世紀を懐ふ」という記事があり、六月号の「海外新潮」欄には「亜細亜分割」「極東に於ける日露両国」という記事がある。これらの論調の根底にあるのは、福沢諭吉以来の〝脱亜論〟の発想だったといってよい。ところが欧米諸国は東洋に注目し、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.